

「木曾古道」の経路と地形

濃尾・各務原地名文化研究会 ○山田 富久
豊田中日文化センター 中根 洋治
奥田建設 奥田 昌男
大建設計 正会員 吉田 光
エイトン 国際会員 可児 幸彦

1. はじめに

古代律令制の時代に、官道が整備された。中部地方には、七道駅路のうち、東山道と東海道が通っている。『続日本紀』には、東山道の支道とも言える「吉蘇路」¹⁾(美濃と信濃を結ぶ道、現代の通称「木曾古道」)が8世紀初頭に造られたとある。しかし現在では、その経路がほとんど分からなくなっている。

歴史学・考古学・歴史地理学などの立場から経路についての研究があるが、本稿では主として現地踏査と聞き取りにより経路を探索・調査した。明らかにできたおおよその経路について報告する。

また経路が、木曾川沿いの谷間を避けて木曾山脈の中腹を通る理由について、地形との関係を考察した。

2. 木曾古道の定義

2.1 木曾古道とは

古代律令制では、7～8世紀に、畿内を除く全国を七道(東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海)に地域区分し、そこを通る駅路を設けた。10世紀編纂の『延喜式』に記録された駅路の総延長は、約6300kmである²⁾。

七道駅路以外の官道が、8世紀に二つ造られている。和銅6(713)年の「吉蘇路」¹⁾および天平9(737)年に鎮守府将軍大野東人が陸奥・出羽に造った道³⁾である。前者の道を、地方での通称に従い「木曾古道」とする(以下、鉤括弧なしの木曾古道)。なお木曾古道の呼称は、時代により様々であり一定しない。

2.2 木曾古道についての文献と先行研究

古い文献では、『続日本紀』および園原旧富(ふるとみ、1703-1776)の『木曾古道記』⁴⁾がある。園原は、現在の長野県木曾郡南木曾町の三留野(みどの)宿にある東山神社の神官である。現代では、木曾川流域(以下、木曾地方)の市町村史・誌^{5),6),7)}や川崎敏(1973)⁸⁾や島方洗一(2012)⁹⁾の研究書がある。

木曾古道は、木曾地方を通して信濃の国府(上田、のち松本)に向かう。その経路については、鳥居峠を通る説と菅川沿いに境峠を通る説の二つがある。園原、川崎、島方は、前者の鳥居峠経由の立場であり、通説である。筆者は、大桑村誌⁵⁾や木祖村での聞き取りなどにより後者の境峠経由をとる。

なお鳥居峠と呼ばれるのは明応年間(1492-1501)からで、古くは県坂(あがたざか)と呼ばれた。峠という字は日本で作られた国字であり、○○峠の呼称は後世のものである。簡略化のため、以下、鳥居峠とする。

木曾古道創設に関連する記述が、『続日本紀』に二箇所ある。大宝2(702)年の「岐蘇山道」¹⁰⁾と和銅6(713)年の「吉蘇路」である。前者を東山道駅路と解し後者を木曾古道として区別する説と、両者ともに木曾古道とする説の二説があり、意見が一致していない。8世紀初頭に木曾古道が造られたとする点は共通している。

木曾古道開設以後の経過は詳細が不明であるが、次第に使われなくなり、現在では経路がほとんど分からなくなっている。戦国時代に拓かれ江戸時代に整備された中山道は、木曾川沿いの谷間にあり、木曾古道と

Route and topography of the Kiso-ancient road : Tomihisa Yamada (Noubi-kakamigahara society for Place name and culture), Youji Nakane (Chunichi Culture Center), Masao Okuda (Okuda Construction Company), Hikaru Yoshida (Daiken Sekkei, Inc.) and Yukihiko Kani (Eiton Co., Ltd.)

は別の新しい道である。

3. 木曾古道の経路を探す

3.1 方法

各地域に古道とされる道があるが、断続的で短く、どこに向かうか分からない場合が少なくない。一つの線でつながり、しかも尾根や山腹を通る道であれば、古道の可能性が高い。

そこで過去の文献を参考にしつつ、主として地元での聞き取りと現地の踏査を繰り返す中で、木曾古道の経路を探索した。「古道は川沿いではなく、尾根または山腹を通る」¹¹⁾との前提で道を探した。

3.2 道の選び方

以下の方法で道を選んだ。

- ・目的地に最短の歩きやすい道に行く
- ・尾根や谷を横切る場合も、同様である
- ・川を渡る時は、徒渡り（かちわたり）または丸太橋のため、川の上流部または中流部の浅瀬を通る
- ・ケルンコル（断層鞍部（図-1））が近くにある場合は登り下りが少ないのでそこに行く
- ・古い歴史（江戸時代より遡る）のある寺社や遺跡が近くにある場合は、そこに行く
- ・聞き取りによって確認できる道跡に行く

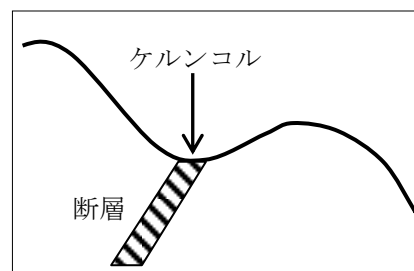


図-1 ケルンコル断面図

3.3 渡河地点

延喜の官道には、「日理（わたり）」という駅家が三ヶ所¹²⁾あり、そのうち二ヶ所は東山道信濃国の犀川と千曲川の渡河点である。古代に川を渡ることが、難事であり関心事であったことを示している。木曾地方には、寄合渡などの〇〇渡（ど）という地名があり、複数の川が合流する場所（合流点）を表す。合流点の下流に渡しが作られることがよくある。

木曾古道では木曾川に流れ込む支川をいくつか渡るが、川幅が狭く浅瀬であるため、徒渡りや丸太橋が可能であったと考えている。実際に渡る場合は、勾配を緩やかにするため川を遡行するように回り込んだと思われる。伊奈川や滑川など川幅が広い川は徒渡りであり、川幅が狭い約 10m 以内の川は、丸太を投げかけて渡ったであろう。

4. 踏査の結果

4.1 経路の主な地名

踏査によって得られた木曾古道の経路は以下の通り。

主な地名（現代）を以下に記す。沢や川を渡る場合は、主なものを【 】で表した。踏査した区間を「－」、未踏査の区間を「…」とした。

中津川市湯船沢…馬籠峠…南木曾町妻籠…三留野－与川道（胡桃田－小川野平－須合平）－大桑村長野－
【伊奈川（天橋跡）】…勝負平…【松渕沢】－【境沢】－上松町【大沢】－念仏平－【栈沢（栈沢の滝）】
－【荻原沢】－東野－吉野－【滑川】－徳原（駒ヶ岳神社里宮）－大木－【十王沢川】 芦島－馬留－木曾
町（旧湯）－駒の湯－【八沢川】－大原－【正沢川】－渡沢…日義野上（御岳神社）…宮ノ越（旗挙八幡
宮）－【木曾川本川】－木祖村向吉田－野中原…小木曾…境峠…旧奈川村寄合渡…松本市内

4.2 経路の特徴

木曾古道は、木曾山脈の西の中腹をほぼ南北に貫く道である。東山道の最大の難所である神坂（みさか）峠（古代は信濃坂）の西にある中津川市湯船沢で別れて馬籠峠・妻籠宿を通る。「園原先生碑」を経て、三留野宿を過ぎた所で中山道と別れ、与川道を北上する。この道は、中山道の難所（三留野宿と野尻宿の間にある羅天の棧）の迂回路であり、京都から徳川将軍家へ輿入れする姫が二人通った。元々、木曾古道が通じていた道を、江戸時代に再整備して利用したと思われる。

この後、幾つかの沢を渡り、登り下りしながら、高い所では標高 700～1200m を北進する。

伊奈川は比較的大きな川で、江戸時代には、橋守のいる大きな刎ね橋が下流にあった。木曾川との合流点近くには岩出観音があり、そこは橋場という地名である。橋場の東隣の越坂は、縄文時代の鍬を拾えた場所で、古くから人が暮らした地域である。古代の渡河地点は、岩手観音から約 2.1 km 上流にある伊奈川神社近くの天橋跡辺りであると地元で聞いた。園原は「(筆者注：岩手観音は) 古道の渡より五六町下なり…須原宿の東糸瀬山の麓古道筋」¹³⁾と記している。園原の言う「古道の渡」は、距離が少し異なる。その後は矢垂沢を登り、勝負平を経て、糸瀬山の西の麓に行く。

松沢沢、境沢、大沢を渡るが、境沢と大沢の間は道跡を見つけにくい。大沢を渡り、薬研堀のある道を経て、松の平―念仏平へ至る。棧沢に向かって下るが、滝はやや上流にある。滝の左岸には道跡があり（写真-2）、断層によるとと思われる幅約 3m のキレットがある。滝の下流は切り立った崖で登り下りが難しいため、棧道は滝の上部にあったと思われる。

荻原沢を第 5 号谷止辺りで渡る。東野の阿弥陀堂から 700m 東（上流）の位置である。ここからは風越山の中腹を辿り、吉野に至る。吉野は縄文式土器が発掘された古い地域である。滑川を渡り、徳原（駒ヶ岳神社里宮）―大木―芦島―馬留を経て、山中にある旧湯から駒の湯のキャンプ場（キャンプフィールド木曾古道）を通る。八沢川を渡り大原を経て、正沢川を渡る。渡沢から山に入り、木曾町日義野上（御岳神社）から木曾川本川へ下る。

宮ノ越宿の北にある旗竿八幡宮辺りで、本川を左岸（東）から右岸（西）へと渡る。このお宮は、かつて木曾義仲の居館があり、治承 4（1180）年に平家追討の挙兵をしたという旧跡である。

その後、木曾川右岸を遡り、向吉田を経て菅川が合流する地点で本川と別れ、菅川沿いの道を北進する。菅川右岸（西）には、標高約 1,000m の「菅古道」¹⁴⁾が断続的に残っている。途中、野中原は「西古道」（以下、鉤括弧なしの西古道、後述）との追分で、さらに北へ進む。小木曾からは笹川（木曾川）沿いの山腹を辿り、境峠を越え、寄合渡など旧奈川村経由で、信濃国府（松本市）へ向かう経路であった。



写真-1 伊奈川为天橋跡（正面北東）の矢垂沢のむこうに勝負平）

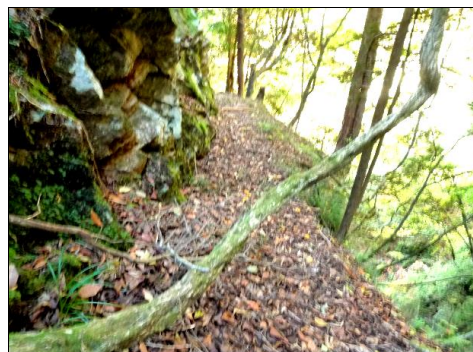


写真-2 棧沢の滝（左岸の古道）

5. 経路と地形の考察

5.1 断層との関係

木曾古道の経路と周辺の断層を、図-2、3、4 に示す。木曾古道の南部（図-4、湯船沢～野上）は、長さ約

46kmの木曽山脈西縁断層帯主部（馬籠峠断層・上松断層）¹⁵⁾とほぼ一致する。木曽川を渡ったあとの木曽古道北部の最南部（図-3，向吉田～小木曽）も，国土地理院地図の菅川沿いの断層¹⁶⁾とほぼ一致する。なお木曽古道北部の中央部（図-3，小木曽～寄合渡）は，境峠・神谷断層帯¹⁷⁾と近い位置にあるが未踏査である。

木曽古道ではケルンコルによく出会う（写真-3，4）。ケルンコルは，断層破碎帯の浸食によりできた窪みであるため，直線状で距離が短く平坦であり，山腹を歩くのに都合がよい。

木曽古道はケルンコルの地形を利用しているとの指摘が，川崎の論文^{18),19)}や『上松町誌』²⁰⁾に見られる。木曽古道でケルンコルを行くのは，伊奈川－松渕沢－境沢－大沢－棧沢－荻原沢－滑川の区間である。代表的な山としては糸瀬山・風越山の西の中腹にあたる。



図-2 対象地域（青：木曽古道，茶：中山道，国土地理院地図（電子国土 Web）に加筆）

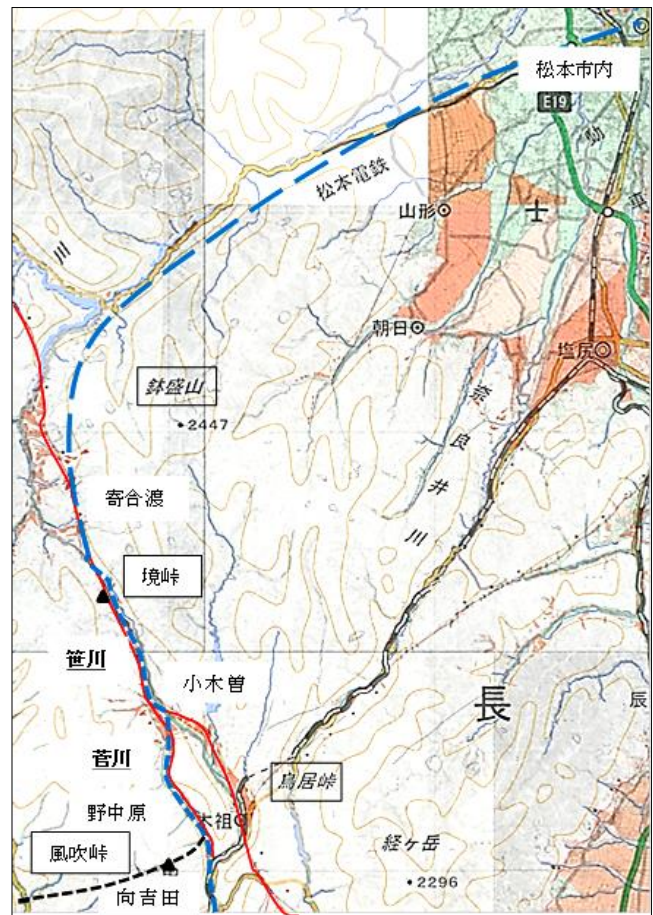


図-3 木曽古道の北部（青：木曽古道，黒：西古道，赤：断層（再描画），国土地理院地図（電子国土 Web）に加筆）

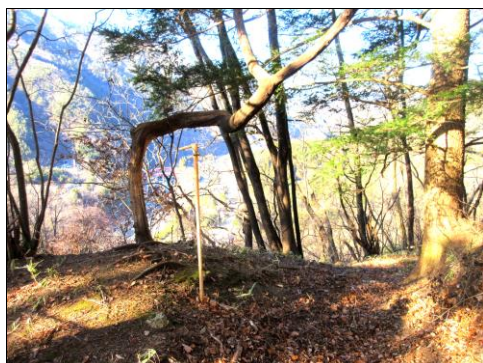


写真-3 境沢－大沢間・第9号鉄塔東近くのケルンコル（右下の古道は北向き）



写真-4 吉野から見る風越山のケルンコル（古道は上中央（南）の窪みを通る）

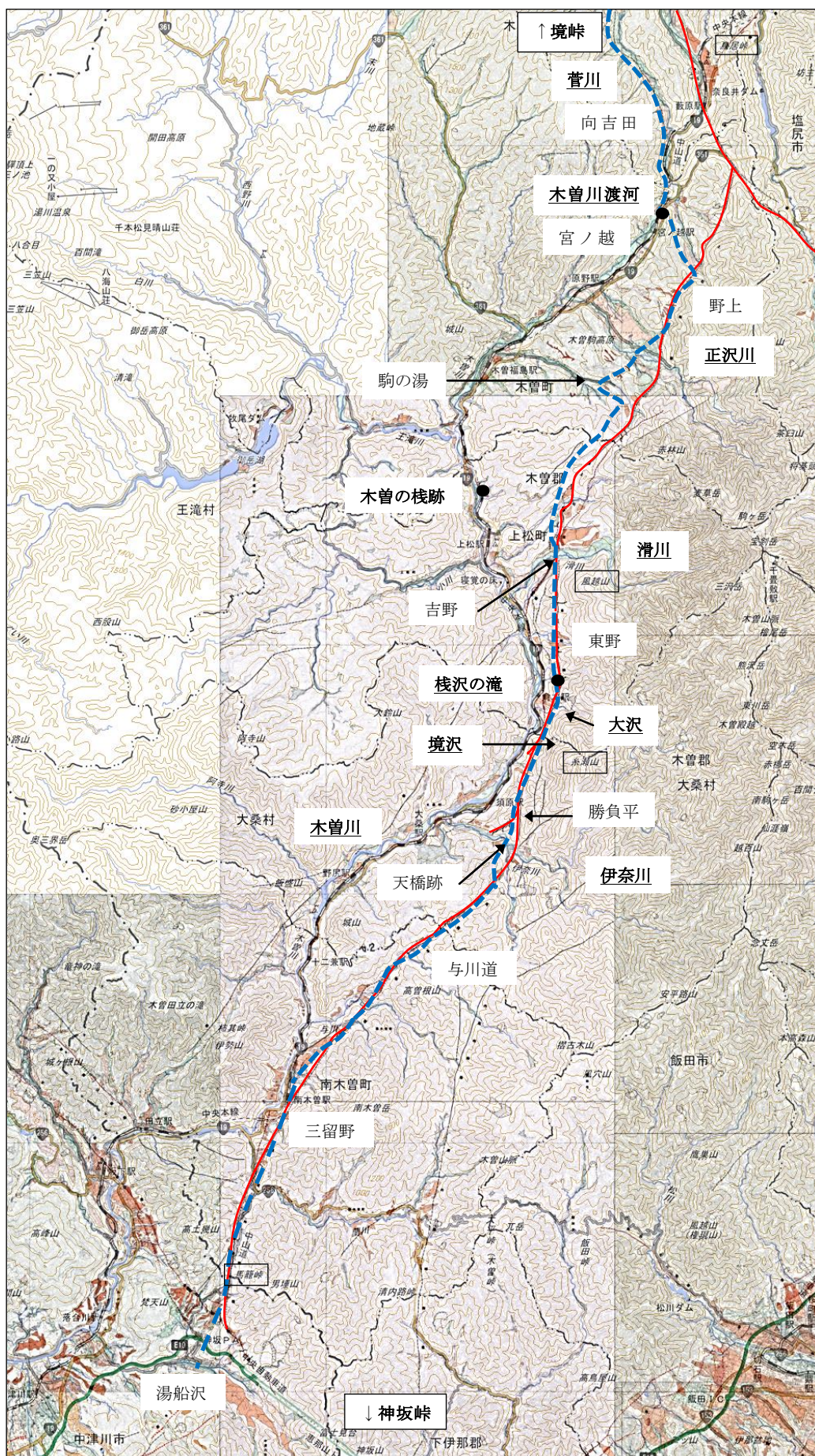


図-4 木曽古道の南部(青:木曽古道, 赤:断層(再描画), 国土地理院地図(電子国土 Web)に加筆)

5.2 信濃国府に向かう経路について

宮ノ越から木曽川沿いに北上して信濃国府へ向かうには、難所の獅子岩があり、通行は困難であった。獅子岩は、昭和8（1933）年に架けられた木曽谷初の鉄筋コンクリート製の「菅橋」（土木遺産認定）のすぐ上流の位置にあったが、昭和58（1983）年の大雨で流れた。

図-5の東周りの経路は、大原―野上―砂ヶ瀬―姥神峠―尾根伝い―鳥居峠（図-5・A）、または大原―野上―砂ヶ瀬―神谷峠―鳥居峠（B）が考えられる。両ルートとも、他の地域とのつながりが弱く歴史を感じられるものは少ない。

また宮ノ越―神谷峠―鳥居峠（C）とする説がある。17世紀末に開設された権兵衛街道と一部重なる経路である。神谷川沿いの谷間であり、山腹の道が見当たらないので、この説をとらない。

ここで想定するのは、西周り、すなわち菅川沿いに境峠経由で信濃国府へ向かう経路（D）である。

その根拠を整理すると、第一に、向吉田～境峠の途中にある野中原で、西古道（E）と合流する点である（写真-5）。西古道は、岐阜県関市で東山道飛騨支路と分かれ、信濃国府に至る道で、西から幸沢―風吹峠を経て、野中原に下ってくる。風吹峠近くにかつては草刈場があり、この辺りに古くから人が住んでいたと思われる。第二に、寄合渡～信濃国府の間は、飛騨国府（高山）と信濃国府とを結ぶ「野麦街道（飛騨街道）」と重なる。第三に「菅古道」が、菅川右岸の山腹にほぼ南北に断続的に残っている。

以上の理由から、木曽古道は、鳥居峠越えではなく境峠越えで信濃国府に向かったと考えられる。

5.3 棧の位置

棧（かけはし）または棧道（かけはし・さんどう）は、川を渡るための橋ではなく、断崖絶壁の際を通るため造られた道である。岩壁に片持ち梁を差し込み、その上に板を渡した（写真-6）。

中山道の「木曽の棧」跡が、長野県木曽郡上松町にある。戦国時代に道が切り拓かれ、「波計（はばかり）棧道」と呼ばれた。正保4（1647）年に焼失し、翌年に木橋と石垣の道が造られた。その後一部改築されたが、当時の石垣が旧国道19号下の木曽川沿いに保存されている。そこは、平安・鎌倉時代に歌に詠まれた「木曽



図-5 信濃国府への経路（青：経路（A～D）、黒：西古道E、赤：断層（再描画）、国土地理院地図（電子国土 Web）に加筆



写真-5 木曽古道と西古道の追分（人のいる木曽古道は上（北）の十王堂に向かう、西古道は左（西）の風吹峠から下りてくる）

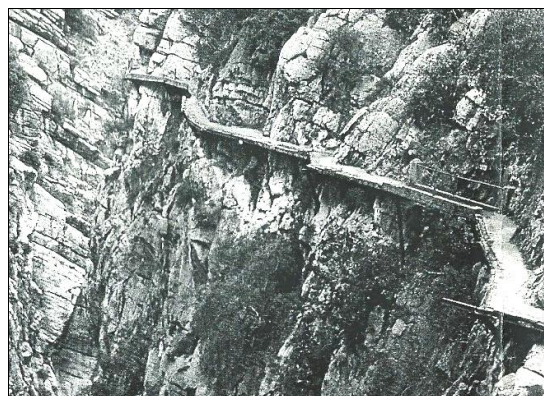


写真-6 棧（『世界の秘境Ⅰ』のエルチョロ峡谷より）

の棧」とは別の場所であることになる。

問題は、棧がどこにあったかである。結論から言えば、上松町の棧沢上流にある高さ約 20m 以上の滝の上部にあったと考える(写真-7)。川の名前が棧沢であるからではなく、木曽古道がこの滝辺りを通るからである。

棧沢の南には念仏平があり、無事に棧を行けるよう念仏した場所だと伝えられている。棧沢を渡った東野には、正応年間(1288-1293)に作られたとされる阿弥陀堂がある。

代表的な和歌に、西行(1118-1190)の「波とみゆる雪を分けてぞこぎ渡る 木曽のかけはし底も見えねば」『山家集』がある。底の見えない高い位置に棧があることから、木曽川沿いではなく、棧沢の棧を歌ったものといえる。「木曽の棧」が歌枕になるほど知られていたのに、滝が詠まれなかったのは、危険な道の印象が強かったためと思われる。

なお現在の棧沢の滝は、道が崩れておりアプローチが難しいため、地元でも見たことのある人は少なく正式な名称がない。

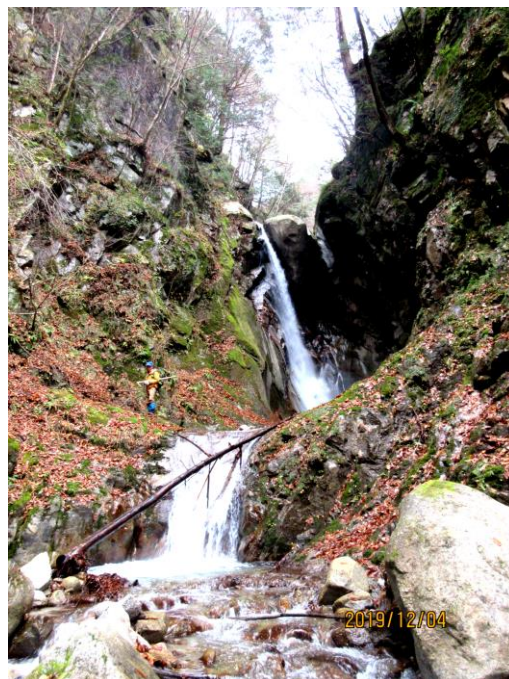


写真-7 棧沢の滝

6. まとめ

木曽古道の経路の大半は、木曽川沿いの谷間ではなく、山の中腹を通っている。大半が、木曽山脈の中腹を北進する。川に向かうのは、木曽川の支川をいくつか渡る場合を除けば、木曽川本川を渡る(野上―宮ノ越―向吉田)一度だけである。木曽古道で木曽川沿いを歩くことはない。本川を渡ったあと向吉田―野中原―小木曽への道は、南へ流れる菅川右岸の山腹を通る。

このように山の中腹を通る理由としては、川幅が狭く徒歩による渡河が容易である、断崖などの危険な道や山崩れなどの災害を避ける、道が谷間より乾いているなどがあげられる。登り下りが多い点は、川沿いの谷間の道より不利である。

江戸時代になると、道を切り拓き、橋を架け、宿駅・伝馬などが整備されて、木曽川沿いの中山道をなんとか歩けるようになった。

今後の課題としては、第一に、西古道の経路を明らかにしたい。西古道は木曽川西岸を通るのでそう呼ばれ、木曽古道は木曽川東岸を通るので「東古道」とも呼ばれる。この二つの道の比較により、古代の道が山腹や尾根を通る理由をより明らかにできると思われる。園原の『美濃御坂越記』²¹⁾などに経路の概略が書かれていることが参考になる。

第二に、木曽古道の役割や機能、すなわち物流・交易の解明である。木曽古道では、「何を」「どこからどこまで」運んだのか。道が使われなくなったのは、「いつ」からで「なぜ」なのか。衰亡の原因は、運搬手段として牛や馬が使える他の道との競合によるものか、などを明らかにすることである。

謝辞

圖中登志彦氏(木祖村観光協会)を始めとする地元の方々に、現地の案内や資料提供などお世話になった。諸氏のご協力がなければ、木曽古道を辿ることはできなかった。ここに記して感謝の意を表する。

参考文献

- 1) 続日本紀 卷第六, 国史大系 第二卷 (1897), 経済雑誌社, p.80.
- 2) 武部健一 (2004): 完全踏査 古代の道, 吉川弘文館, pp.2-19.
- 3) 前掲 1), 卷第十二, pp.206-207.
- 4) 園原旧富: 木曾古道記, 蘆田伊人編 大日本地誌体系 第14冊 諸国叢書木曾之二 (1917), 大日本地誌体系刊行会, pp.391-430.
- 5) 大桑村 (1988): 大桑村誌, 上巻, 大桑村, pp.148-151.
- 6) 長野県木曾郡木祖村教育委員会 (1973): 木曾の鳥居峠, 木祖村教育委員会, pp.14-15.
- 7) 木祖村誌編集委員会 (2001): 木祖村誌 源流の村の歴史, (上) 古代・中世・近世編, 木祖村誌編集委員会, pp.546-548.
- 8) 川崎敏 (1973): 木曾一歴史・文学・地誌一, 木耳社, pp.59-61.
- 9) 島方洗一編 (2012): 地図で見る東日本の古代 律令制下の陸海交通・条理・史跡, 平凡社.
- 10) 前掲 1), 卷第二, p.25.
- 11) 中根洋治 (2011): 秋葉古道と愛岐地方の旧河道, 風媒社, pp.8-31.
- 12) 延喜式 卷二十八兵部式, 皇典講究所・全国神職会校訂 延喜式 下 (1929), 大岡山書店, pp.974-975.
- 13) 前掲 4), p.413.
- 14) 木祖村菅地区に残る古道の地元での呼称 (信濃路てくてく編 (2017): 木祖村・菅周辺散策ガイドブックー菅古道といういにしへの道が通る木曾谷最奥の隠れ里を訪ねる旅ー, 信州ワクワクフットパス 28, 特定非営利活動法人つなぐ)
- 15) 地震調査研究推進本部: 木曾山脈西縁断層帯, 地震調査研究推進本部ホームページ (2020 年 4 月 1 日取得, https://www.jishin.go.jp/regional_seismicity/rs_katsudanso/f045_kiso-sanmyaku/) の断層名称を使用
- 16) 国土地理院: 地理院地図, 国土地理院ホームページ (2020 年 4 月 1 日取得, <https://www.gsi.go.jp/tizu-kutyu.html>).
- 17) 地震調査研究推進本部: 境峠・神谷断層帯, 地震調査研究推進本部ホームページ (2020 年 4 月 1 日取得, https://www.jishin.go.jp/regional_seismicity/rs_katsudanso/f046_sakaitouge_kamiya/) の断層名称を使用
- 18) 前掲 8), pp.61-62.
- 19) 川崎敏 (1976): 中山道の地形性, 市邨学園短期大学人文科学研究会人文科学論集, 第 18 号別冊, pp.55-56.
- 20) 上松町誌編纂委員会 (2006): 上松町誌, 第三巻歴史編, 上松町教育委員会, pp.99-100.
- 21) 園原旧富: 美濃御坂越記, 長野県上伊那郡教育界編 露原拾葉 第4輯 (1936), 鮎沢印刷所, pp.35-55.